『春の雪』に現れる2・26事件

－「恋愛小説」に潜む政治事件－

金子真樹*

(e-mail: jinsu1110@hanmail.net)

目　次

1.はじめに
2.『春の雪』の恋愛小説としての特異性
3.「勅許」と「禁忌」
4.『春の雪』における「二月二十六日」
5.「恋闕の情」と清顕
6.おわりに

1.はじめに

三島由紀夫の『春の雪』は1965年9月より1967年1月まで雑誌「新潮」に連載された長編小説で、作者のライフワーク1)とも言える『豊饒の海』シリーズ（全四部）の第一部として書き上げられた作品である。

松枝清顕（まつがえきよあき）と綾倉聡子（あやくらさとこ）という、ともに華族の子女同士の悲恋を中心に、1912年（大正元年）から1914年（大正3年）を時代背景に描かれた小説で、菊田一夫の脚色により1969年9月に初演されて以降、何度も舞台化されたり、三島の死後も記憶に新しいところでは

* 又松大学校 外国人専任講師

1) 三島由紀夫「私の近況-「春の雪」と「奔馬」の出版」に「四、五年前から私は、そろそろライフ・ワークともいうべき大長編に取り組みたいと思ってゐた」（33、518）とある。

本論考では特に断りのない限り、三島由紀夫からの引用文はすべて『三島由紀夫全集』（全35巻＋補巻1、新潮社、1973.4-1976．6）によるものとし、引用箇所並びに作品全体の所収ページを表す際は（巻、ページ）の順に括弧書きで表示するものとする。当該引用箇所は同全集の33巻、518ページに所収されているので（33、518）となる。

www.kci.go.kr

2005年に行定勲監督[2]によりこの作品を原作とする映画が公開されたりするなど、さまざまな話題を提供してきた三島由紀夫代表作の一つであると言える。

一般的に2.26事件と三島文学との関係ということで直ちに思い起こされるものとしては、「憂国」「十日の菊」「英霊の声」という、いわゆる＜2.26事件3部作＞[3]があり、また『豊饒の海』シリーズとして考えれば、財界要人の暗殺を企てるテロリスト・飯沼勲を主人公とする第二部『奔馬』（18、399-816）が最も2.26事件と関わりがあると見ることに異論はない。しかしながら、論者が『春の雪』を精読してみるに、この作品にも決して同事件と無関係ではないと思われる、無視することのできない描写がいくつか現れていることがわかった。

本論考は『豊饒の海』第一部である『春の雪』について、「勅許」「禁忌」「恋闕の情」といったキーワードに注目した上、特に2.26事件と同作品の関係に焦点を当て、従来は余り議論されることのなかった角度から、この作品に描かれている世界を解明しようという試みである。

2．『春の雪』の恋愛小説としての特異性

まずはじめに、この作品が恋愛小説なのかどうか、という問題を再点検することによって『春の雪』の文学的特色を整理してみることとしたい。

この作品を読んでみると、紛れもなく恋愛小説的な要素を基礎として構成されており、主人公・清顕の聡子に対する激しい情が物語の中核を為していることが認められる。また、これが恋愛小説であることは、三島自身が語るいくつかの言説によって、一応明らかにされている。

曰く「第一巻「春の雪」は王朝風の恋愛小説で、いはば「たわやめぶり」あるひは「和魂」の小説」、第二巻「奔馬」は激越な行動小説で、「ますらをぶり」あるいは「荒魂」の小説、第三巻「暁の寺」はエキゾチックな色彩的な心理小説で、いはば「奇魂」、第四巻（題未定）は、それの書かれるべき時点の事象をふんだんに取込んだ追跡小説」（34、27）[4]であり、曰く「私はもともと、現代では恋愛小説は不可能だとか、優雅な文学は不可能だという、あらゆるインテリ的情勢論を信じない性質であるから、

2）1968年生まれ。熊本県出身。主な作品に「GO」、「世界の中心で愛を叫ぶ」がある。
3）三島自身が名付けたもので、「憂国」（1961年1月発表）、「十日の菊」（1961年11月発表）、「英霊の声」、（1966年6月発表）を指す。
4）「「豊饒の海」について」（初出は1969年2月26日付毎日新聞）。

www.kci.go.kr

以前は「潮騒」を書き、今また「春の雪」を書いただけのこと」（34、114）[5]である。

作者自身がこのように『春の雪』について恋愛小説であると評しているのであるから、それはそれとして素直に受け取ればいいようにも思う。また、小説に描かれている＜許されない愛＞と＜主人公の死＞という、古典的な設定も恋愛小説の王道と言えなくもない。実際に『春の雪』が古典王朝文学の一つである『浜松中納言物語』を下敷きとしていることは作者自らが明らかにしている[6]ほか、両者の相似点と相違点について詳しく述べた論考「『豊饒の海』と『浜松中納言物語』」[7]にて対馬勝淑は『豊饒の海』が『浜松中納言物語』の藍本であることを、かなり具体的に明らかにしている。また、『浜松中納言物語』のベースとなっているとも言われる『源氏物語』と『春の雪』との関連を重視する論考[8]も現われているほか、古くは長谷川泉が『豊饒の海』シリーズ完結の翌年には「人間の生において、生死を賭していとわぬ絶対的なものが、第一部「春の雪」においては「浜松中納言物語」とひとしく愛恋とそれにまつわる美にかけられている」[9]と同シリーズを概括する中で述べているとおり、『春の雪』が作者の言葉通り王朝風の恋愛小説であるという認識を基本に据えることは、三島研究の立場として決して特異なものではない。

しかし、同時この作品が通り一遍の恋愛小説として受け止める訳にはいかないこともまた明らかである。周知のとおり長編シリーズ『豊饒の海』には＜輪廻転生と世界認識＞という一大テーマが貫かれているが、こうした形而上的な尺度から見ると、華族同士の恋愛などは遥かに小さいものに見えるし、＜輪廻転生と世界認識＞を離れてみても、後述するようにその＜許されない愛＞と＜主人公の死＞の描かれ方には三島独特のエッセンスが散りばめられていることが見て取れるのである。

先ほどの引用で分かる通り、三島は『春の雪』を『潮騒』（9、9-161）[10]と同系列に置きたいような素振りを見せているが、内容的に見てこれが少なくとも『潮騒』的な意味での恋愛小説でないことは明らかである。あの、健康な肉体の若者と可憐な少女との愛とそのハッピーエンドを、のどかな美しい島を舞台に描いた一種お伽話風の小説に比べて、＜許されない愛＞を描いた『春の雪』にはバタイユ的な＜禁忌とエロチシズム＞のモチーフが前面に打ち出されており、どろどろとした粘着質な何物かを感じさせる。勿論、姦通も王朝文学以来、恋愛小説の典型的な素材ではあるし、物語の要所要所で作者が美しい雪を降らせることに象徴されるこの作品の情緒的で美しい「たわやめぶり」の面は軽視すること

5）「「春の雪」について」

6）「「豊饒の海」について.....」（34、51）にて三島は「「浜松中納言物語」の夢と転生の主題は、第一巻「春の雪」の中に火薬のやうに装填されて、各巻に爆(はじ)けていく筈」であると語っている。

7）對馬勝淑「三島由紀夫『豊饒の海』論」（海風社、1988年1月）

8）島内景二「琥珀の中の虫－「女なるもの」との戦い」、「文芸別冊「三島由紀夫」」（河出書房新社、2005.11）

9）長谷川泉「豊饒の海」、「解釈と鑑賞　別冊現代のエスプリ　第四十八号」（至文堂、1971年2月）

10）新潮社より書き下し長編として1954年6月に刊行。

www.kci.go.kr

はできないだろう。

しかし、勅許を犯してまでの情交→ヒロインの妊娠・中絶→仏門入り→ヒロインに恋い焦がれながらの主人公の死、という後半部の展開は、たしかに王朝風の要素も含まれているのではあるが、その激しさ故に『春の雪』を必ずしも「たわやめぶり」という言葉から連想されるような優雅な恋愛絵巻と見做すことは少々短絡的すぎると考えられる。また、主人公たちの周囲で巡らされる様々な因縁の交差、更には清顕を見守る認識者・本多繁邦の仏教観的な考察の絡み合いという物語の複雑な構図を考えれば、『潮騒』とは本質的に趣を異にする小説であることは容易に見て取ることができるであろう。

『潮騒』について三島は、作品発表の5年後に書いたエッセイの中で「何から何まで自分の反対物を作らう」（29、343）[11]とした作品であることを告白している。『潮騒』が、その世間的、通俗的な成功とは裏腹に三島由紀夫という作家が残した数々の作品としては寧ろ異色な位置づけをされるべきことは、三島の言葉を待つまでもないのであるが、絵に描いたように爽やかな『潮騒』が三島の「反対物」であるならば、『春の雪』で描かれている世界こそ、三島文学の本質に近いと考えられる。

そもそも『潮騒』執筆の1954年と言えば、「私に余分なものといへば、明らかに感受性であり、私に欠けてゐるものといへば、何か、肉体的な存在感ともいふべきものであつた」（『私の遍歴時代』）[12]というように、自らの肥大化した感受性を自覚する三島が、1952年のギリシャ訪問を契機に、ニーチェ流の「健康への意志」を呼び覚まし、古典主義的傾向に憧れていた時期[13]であるから、肉体的自己改造を経て日本回帰に向かっていった晩年の『春の雪』とは異質のものであるのは当然と言えば当然のことである。もちろん、だからと言ってこのことは『潮騒』が直ちに正統的な恋愛小説であるということを意味するものではなく、「ギリシア熱が最高に達した」[14]三島が「強引に、人工的に、単純で古典的な文体で」[15]書いた『潮騒』は、奥野健男が言うごとく「精神性皆無の肉体そのもの、外面そのものの恋愛小説」[16]であり、『春の雪』とは別の意味で＜あり得ない＞恋愛小説ということができる。

『春の雪』に話を戻すと、この作品で特に注意すべき点は、ヒロインである綾倉聡子が、綾倉家の侍女・蓼科に＜性の手ほどき＞を受け、実は「生娘でないものと寝た男に生娘と思はせ、又反対に生娘と寝た男に生娘ではなかつたと思はせる」[17]術を身に着けて

11）「十八歳と三十四歳の肖像画」（1959年5月）
12）『私の遍歴時代』（30、472-473）
13）このあたりの事情は渡部芳紀「太陽の発見-ギリシャ体験と「潮騒」」（「国文学　解釈と教材の研究」、学燈社、1976.12）に詳しい。
14）「「潮騒」執筆のころ」（27、39）
15）「自己改造の試み」（32、283）
16）奥野健男　『三島由紀夫伝説』（新潮社、2000年11月、297ｐ）
17）『春の雪』（18、317）

www.kci.go.kr

いたという、恋愛小説らしからぬ設定である。さらに驚くことは、この＜男性教育＞が、将来的に娘の嫁ぎ先を世話することになるであろう松枝侯爵（＝清顕の父）に対する復讐の意味で綾倉伯爵（＝聡子の父）が密かに画策したものであった、ということである。ここで復讐とは、公家出身の華族（しかも設定としては家柄は傾きつつある）である綾倉家が、維新の功労者として華族に成り上がり、明治末年にあってその威光を誇る松枝家に対する復讐のことである。

これに関しては有元伸子が論考「綾倉聡子とは何ものか－『春の雪』における女の時間－」18)にて「実の父親が娘に期待することとしては一般的ではないのはもちろん、当時の性規範からみても破格のこと」19)と評している通りである。有元の論考は、近代日本における家父長制（その体現者が明治維新の功労者の家系である松枝侯爵）に対する拒否感、違和感を＜優雅の伝統＞を受け継ぐ綾倉家の聡子が抱いていることを指摘した、一種の＜ジェンダー読み＞であり、これまで清顕、本多という男性の立場から語られることの多かった『春の雪』をヒロインを中心に考察した点で意義深いものがある。

有元の論考を敷衍して自論を述べるとするならば、明治新体制以降の家父長制とそれに付随する＜女性への処女性と貞淑の強要＞は、三島にとっては日本古来の優雅とは相容れないものであり、聡子的な登場人物、つまりはセックスに対して解放された人物こそ優雅を具現できると考えているいうことになる。その意味では『春の雪』における蓼科の聡子に対する＜男性教育＞という少々受け入れがたい奇妙な設定も、三島が考えるところの恋愛小説を支えるプロットの一つに過ぎないのかも知れぬ。しかし、常識的に考えて「生娘でないものと寝た男に生娘と思はせ、又反対に生娘と寝た男に生娘ではなかつたと思はせる」ことを娘に強いることは「当時の性規範」どころか、平安時代に遡っても「破格のこと」に相違ないのではないだろうか。

蓼科による＜男性教育＞に関しては、蓼科というしたたかな侍女の性格や、情交シーンにおける聡子の振る舞いなどを勘案し、「蓼科が伯爵の依頼を実行して聡子を操ったとはとても考えにくい」20)という論考もあり、実際に聡子がそのような女性であったかどうかは更に深い検討が必要であるが、少なくともこのようなプロットが『春の雪』に用意されていることを見れば、＜ヒロインの処女性＞が最後まで重視される『潮騒』と明瞭なコントラストを形成していることを指摘するのに左程無理はないと思われる。

このように、そもそも恋愛小説としては少々特異な趣きのある『春の雪』であるが、次章以降では更に、この作品に現れる政治的要素について、触れてみることとする。

18）金城学院大学論集、国文学編36（金城学院大学、1994年3月）

19）「綾倉聡子とは何ものか－『春の雪』における女の時間－」金城学院大学論集、国文学編36（金城学院大学、1994年3月）148 p

20）對馬勝淑「三島由紀夫『豊饒の海』論」（海風社、1988年1月）131 p

www.kci.go.kr

3．「勅許」と「禁忌」

「恋愛小説」である『春の雪』は、主人公の恋愛ということでは悲劇で終わるのであるが、この＜許されない愛＞という物語の流れの中で、その悲劇性を最大限に引き出すため有効に使われている装置が「勅許」である。勅許とは明治憲法下における天皇による許可のことであるが、皇族の結婚については、旧皇室典範21)の規定により皇族同士の結婚、または勅許を受けた華族との結婚に限る22)とされていたので、綾倉聡子が治典王殿下の元に輿入れするとなると、勅許が必要となる。

この物語では第二十四章で勅許が下ったことが記されており、これで聡子の皇族との縁談は正式に決まった形になるのであるが、どちらかというとそれまでの清顕と聡子の関係が少し子供染みた恋愛ゲームに終始していたのが、この章あたりからは話が急転回していく。聡子の縁談にも無関心を装っていた清顕が「勅許」という言葉に反応し、「心は灼熱して、ふしぎな高い胸の鼓動」を覚え「今こそ僕は聡子に恋してゐる」と心の叫びを上げるのである。つまり、清顕の場合は勅許が下ったことによって、反って愛の炎を燃やすことになるのである。これは一体どのような心理なのであろうか。『春の雪』が舞台化されたときのプログラムで、作者は次のように語っている。

> 老練な劇作家菊田一夫氏が脚色演出されるのであるから、面白いものにならないとすれば、罪は原作にあるのである。現代で恋愛小説が成立ちにくいのは、恋愛を阻む絶対的な障碍がないからだが、私は大正初年に時代を移して、その時代における考へられるかぎりの最大最高の禁忌を置いた。それがすなはち「勅許」の問題である。すでに勅許の下りた宮家の許婚を犯すことは、宮妃殿下を犯すことに他ならない。臣下として、これ以上おそろしい不敬はないが、その不敬を敢てするまでに燃え上つた恋愛なら、はじめて本物の恋と云へるだらう。しかし、一方、ハムレット型の優柔不断の主人公清顕は、ひとへに「本物の恋」を味はひたいために、禁忌を犯したのかもしれないのである。 (34、252) 23)

華族とは、明治維新前の公卿や諸侯、それに明治維新の功労者に与えられた特権的階級の総称であり、その建前としての目的は「皇室の藩屏」24)つまり皇室を守ることにある。それゆえ皇族との結婚について天皇の許可が下された伯爵令嬢との恋愛は、臣下としてまさにこの上ない不敬・不忠になる。しかし、三島によればその禁忌こそが「本物の恋」に到達するための道ということらしい。

たしかに三島が言う通り、現代では恋愛はかなりの程度で自由であり、両親の反対によ

21）皇位継承等、皇室に関する定めを決めた法律。
22）旧皇室典範（1890年勅定）第39条、第40条。
23）「「春の雪」について」
24）小田部雄次『華族　近代日本貴族の虚像と実像』（中公新書、2010年3月）3ｐ

www.kci.go.kr

る恋人同士の離別などは陳腐なドラマのストーリーにしか使われないし、不倫ドラマもやや食傷気味な世の中であるから、恋愛小説は成り立ちにくいのかもしれない。また、皇族との恋愛問題ということを考えてみても、ミッチーブームと騒がれた民間人・美智子妃殿下（現皇后）のご成婚以来、皇室の大衆化（いわゆる週刊誌天皇制）が進んだ今、雅子様の不倫が噂されることにも人々は驚かなくなっている。こんな中で「禁忌」そのものがなくなって、最高の恋愛小説が成立しにくいと感じる三島の考えも、わからないではないが、『豊饒の海』におけるバタイユ的「禁忌」のメカニズムを簡明に説明[25]した仏文学者・清水徹がその論考にて、

> ヨーロッパにおいて、かつてはキリスト教によって実体化された≪聖なるもの≫が、いまふたたび捕捉しえぬ非人称的ななにものかに戻っている事実と比較すれば、三島氏はまったく逆の方向に進み、まるでその天皇の意志をつうじて逆説的にもキリスト教的風土を－超越の神学体系としてのキリスト教ではなく、制度としてのキリスト教的風土を－現代の日本に打ち建てようと祈念しているかのようにさえ思える。[26]

と指摘しているように、「バタイユ体験」[27]を基にした三島の「禁忌」は、政治思想的なものが如実に背景に組み込まれているという点で異質である。

日本の敗戦と、その二年後の新憲法制定により、「国民の象徴」としての天皇制が成立する。そして同時に「皇室の藩屏」であるところの華族は解体され、もはや皇室との恋愛や結婚は国民すべてに等しく機会を与えられたものとなった。「私は私のエステティックを掘り下げるにつれ、その底に天皇制の岩盤がわだかまつてゐることを知らねばならなかつた」（32、366）[28]と天皇制に美学を見て取る三島にとって、天皇や皇族は絶対的な存在であり、戦後民主主義的な＜象徴天皇制＞や＜開かれた皇室＞などというものは、およそ美的対象とはなりえなかったことは十分に窺うことができる。林房雄が三島自決の後に書いた追悼エッセイ集『悲しみの琴』では、天皇主催の園遊会に出席した三島が「今日ほど失望したことはありません。宮内官僚演出の園遊会で、天皇皇后も皇太子も妃殿下も俳優あつかいです。僕は週刊誌天皇制の実体を目の前につきつけられたのです」と嘆いたエピソード[29]が紹介されているが、察するに三島にとって皇族とは単なるスターなのではなく、

25）清水はここで「『豊饒の海』四部作においては、三島氏は≪聖なるもの≫の矛盾の力学を構成する「禁止」「違反」「不可能」などのバタイユの用語をほとんど使用するに至る」と述べている。「ジョルジュ・バタイユと三島由紀夫」（「国文学　解釈と教材の研究　五月臨時増刊　三島由紀夫のすべて」、学燈社、1970年5月）152ｐ

26）「ジョルジュ・バタイユと三島由紀夫」（「国文学　解釈と教材の研究　五月臨時増刊　三島由紀夫のすべて」、学燈社、1970年5月）155ｐ

27）「ジョルジュ・バタイユと三島由紀夫」（「国文学　解釈と教材の研究　五月臨時増刊　三島由紀夫のすべて」、学燈社、1970年5月）150ｐ

28）「二・二六事件と私」

www.kci.go.kr

近づきがたいカリスマでなければなかったと思われる。

実際、三島は1969年に行われた東大全共闘との討論会[30]にて、自身が学習院高等科の卒業式で昭和天皇から時計を賜り、そのときの三時間にわたっての「木像のごとく全然微動だにしない姿」に「それはとてもご立派だった、そのときの天皇は」との個人的な思い出を振り返り、そうした個人的な記憶に基づく天皇のカリスマ性を「どうしてもおれの中で否定できないのだ」と語っている。

このようにして見てくると、三島の言う「本物の恋」の正体も、皇族との結婚に関して勅許が下った女性と関係する「禁忌」が、究極のメロドラマとして最大の効果を発揮するという、単なるプロットとしての意味合いよりも、三島の独特な美学に基づく世界観の表出と考えられなくもない。戦後民主主義の成立により皇族のカリスマ性を誰もが忘れてしまった時代、三島は『春の雪』で「禁忌」という、不敬・不忠のプロットを構築することにより、それを文字媒体を使った大衆文化レベルで逆説的に復権させようと試みているように論者には思えてならない。

もちろん『春の雪』は、このような勘ぐりを捨てて単純に大正時代を舞台に華族同士の悲恋を描いた文芸ロマンとしても十分に楽しめる内容である。清顕の聡子に対する繊細な心の動きを綴った心理小説風の筆もきめ細かく冴えているし、また逢瀬を重ねるいくつかのシーンの描写は非常に美しい。『春の雪』は作者の解説に違わない「たわやめぶり」が随所に溢れている。

しかし、それでもやはり『春の雪』をそのようなロマンチックで情緒的な小説という切り口で解釈するのは余りにも単純すぎるように思われる。＜恋愛小説＞であることには異論はないが、恋愛そのものを描いたというより、＜恋愛小説＞を通して自らの思想的美意識を文学作品に抽出した、という感が拭えない。作品を精読してみると、「たわやめぶり」というよりはむしろ「ますらをぶり」に近い、三島独特の「エステティック」に相当する部分が垣間見られるからである。具体的に指摘するならば、それは『春の雪』に随所に現われる、2･26事件との不思議なイメージの重なりである。

4．『春の雪』における「二月二十六日」

ここで、この作品の中にに記述される時間の進行に着目して物語の流れについて考えてみることにしたい。『豊饒の海』シリーズは、主人公の輪廻転生とそれを生き証人である本多繁邦が明治末年から大正、昭和前期、後期というふうに各時代ごとに見つめていくという骨格を有している構造上、各巻における年代については、ある程度はっきりと読者に伝えら

29）林房雄『悲しみの琴』（文芸春秋、1972年3月）42ｐ
30）段落内の引用は三島由紀夫・東大全共闘『美と共同体と東大闘争』（角川書店、2000年7月）109ｐによる。

www.kci.go.kr

れている。すなわち『春の雪』でいえば大正元年（＝明治末年）から大正3年がそれである。しかし殊『春の雪』における物語の時間的現在地、すなわちその場面における正確な日付については、比較的短い歴史的時空間を背景とするこの作品では、特に作者が読者に伝えるような意識では書いていない。

もちろん、歌会始や花見や夏の海岸など、季節感は要所要所十分に盛り込まれているのであるが、物語の終盤以前において具体的な日付が確認できる箇所は少ない。前半から中盤に掛けてでは観桜会での献立表に書かれた「大正二年四月六日」31)、そして聡子の治典王殿下との婚姻に関する宮内庁内での連絡文書に書かれた「大正二年五月十二日」32)および「大正二年五月十五日」33)だけである。これらは物語の進行を示すために地の文で表現された日付というより、小説内に挿入されたある記録について、付随的に添えられたデータの一種でしかない。34)一応、優雅な「たわやめぶり」を標榜する『春の雪』には地の文においていちいち日付を記すような野暮は必要なかったのではないかと推測される。そのことは、清顕の記す「夢日記」にさえ、日付が添えられていないことからも想像がつく。

ところが、終盤あたりになると少々趣きが変わり、日付がしばしば表されるようになる。それを指摘してみると、聡子の大阪への出発を「十一月十四日」と具体的に表したのに続き、綾倉母子の月修寺入りも「十一月十八日」、また、松枝侯爵が警察に手を伸ばして聡子を奪回しようと画策したのが「十二月四日」、と三つほど日付が記されている。しかし、論者の考えでは、これらは「十月に入つて、納采の儀は十二月に行われるというお達しがあつた」（18、275）という第三十七章からの展開に対応するための記述に過ぎない35)。つまり、「納采の儀」という、皇室との結納の儀式にタイムリミットが迫る中、聡子の妊娠・剃髪事件という松枝・綾倉両家を震撼させる事件が続き、それに慌てふためき対応する華族たちの姿を切羽詰まった調子で表現するためには、ある程度時間の進行をはっきりさせておく必要があり、そのためにはもはや優雅な「たわやめぶり」などという悠長なことを言っていられなくなったことの表れであると考えられる。事実、「十二月四日」の部分では「納采の儀」まであと一週間しかないことが記されている。

そして、日付に関して最も注目すべき点として指摘したいのは、病に苦しむ清顕が聡子会いたさゆえに家を抜け出し月修寺に行き、何度も面会を断られた末に結局一度も会えずに死んでいく第五十一章から最終・第五十五章までの記述には、かなり明確に何月何日であるかが綴られていることである。まず、清顕は2月21日の晩に大阪のホテルに泊り、次

31）『春の雪』（18、148-149）
32）『春の雪』（18、167）
33）『春の雪』（18、167）
34）その他、『春の雪』に現われる日付としては、小説冒頭で「得利寺附近の戦死者の弔祭」の写真の説明として添えられる「明治三十七年六月二十六日」があるが、これは時系列的には小説の始まる前の時点における日付である。
35）因みに第三十七章は、聡子の妊娠が読者に明らかにされる章であり、物語が急転回する箇所と言える。

www.kci.go.kr

の日朝早くホテルを出て奈良の月修寺を目指すことが記されている。しかし「剣もほろろの対応」[36]で追い返され、翌23日から毎日寺を訪ねるのであるが、寺の対応、いや聡子の対応は同じであった。第五十一章では2月21日から2月25日までのこのような推移が記されている。

論者が問題にしたいのは、やはり2月26日である。第五十一章は聡子に面会を断られ続け、体調も悪化している清顕が苦しみの末、親友・本多に救いの電報を入れ、「—さうして、寝苦しい夜をすごして、二十六日の朝になつた」で終わる。そして「この日、大和平野には、黄ばんだ芒野(すすきの)に風花(かざばな)が舞つてゐた。春の雪というにはあまりに淡くて、羽虫が飛ぶような降りざまであつた（後略）」の書き出しで第五十二章が始まる。この章ではまるまる全部2月26日一日の清顕の行動に費やされるのであるが、先の21日から25日までの5日間が実にあっさりと描写されているのに比べ、対照的である。この5日間の描写が、第五十一章正味7ページの内、実質2ページしか使われておらず、聡子に面会を拒否されるという、清顕にとっては辛い局面にも拘らず彼の心理的描写が少ないのに比べ、この第五十二章では6ページを一日に費やして清顕の心の叫びを描いている。それはまるで2月26日の朝を待っていたかのようでもある。

物語の筋から言うと、この日もそれまでと同じく清顕は聡子に面会を拒否され、もはやそれ以上会いに行く体力がなくなった清顕は、本多と共に帰京し、その二日後に亡くなる。これが『春の雪』の結末であるが、では作品のクライマックスをこのような構成にした作者に、どのような意図が隠されているのであろうか。

三島由紀夫が2･26事件に並々ならぬ執着をいだいていることは、この作家が書いたいくつかの評論や、いわゆる＜2･26事件3部作＞によって夙に知られているが、こと『春の雪』と、この昭和史の一大事件との関わりについては、シリーズが完結する前の時点で既に野口武彦が「明治四十五年を舞台にしたこの悲恋小説は、何と作者自身の前生(さきしょう)と思わせるまでに現在の問題を投影されていることだろうか」とし、「雪－兵士－至福。この観念連合が何を予感しているかはいうまでもないだろう」[37]と指摘しているものの、『春の雪』の構成上の意味合いについては、これまであまり触れられることはなかった。

その大きな理由は＜2･26事件3部作＞の圧倒的な印象もさることながら、言うまでもなく『豊饒の海』シリーズにおける第二部『奔馬』の存在が大きいことであり、昭和初期の過激な愛国テロリスト・飯沼勲を主人公とする「ますらおぶり」な小説のイメージが強すぎるために、『春の雪』はその陰に隠れて、血なまぐさい2･26事件とは相容れない「たわやめぶり」のイメージに固定されがちだからである。しかし、2月26日だけを独立した章の中で

36）『春の雪』（18、374）
37）野口武彦『三島由紀夫の世界』（講談社、1968年12月、239-240ｐ）

www.kci.go.kr

扱っていること、さらに作者がその日、朝から雪を降らせていること38)を考えると、『春の雪』と2･26事件の関係が無視されていいレベルとは思えない。特に、この作家が他の作品を通じて2･26事件に非常な拘りを見せてきたことを考えると、これが偶然であるとは考えにくい。

もちろん、タイトル『春の雪』に込められた「雪」の意味には、第十二章で清顕と聡子が俥の中で交した初めての接吻における情緒的背景としての雪のイメージとの重なりもあるはずである。しかし、その限りなく美しい二人の姿が描写されている第十二章には、やや唐突に以下に引用する不思議な情景も記されている。

> あたかも俥は、邸の多い霞町の坂の上の、一つの崖ぞいの空地から、麻布三連隊の営庭を見渡すところへかかつてゐた。いちめんの白い営庭には兵隊の姿もなかつたが、突然、清顕はそこに、例の日露戦役写真集の、得利寺附近の戦死者の弔祭の幻を見た。
>
> 数千の兵士がそこに群がり、白木の墓標と白布をひるがへした祭壇を遠巻きにしてうなだれてゐる。あの写真とはちがつて、兵士の肩にはことごとく雪が積み、軍帽の庇はことごとく白く染められてゐる。それは実は、みんな死んだ兵士たちなのだ、と幻を見た瞬間に清顕は思つた。あそこに群がつた兵士は、ただ戦友の弔祭のために集まつたのではなくて、自分たち自身を弔ふためにうなだれてゐるのだ。（18、103）

ここで注目しなければならない点は、清顕を乗せた俥が「麻布三連隊」の営庭に差し掛かったときに、このような幻を見たことにある。高橋正衛（まさえ）『二・二六事件　「昭和維新」の思想と行動』39)を参考にすると、2･26事件決起部隊の主力は歩兵第一連隊と歩兵第三連隊の二つであるが、その二つとも現在の港区西麻布付近に本拠があったことがわかる。これは決して「夢見がちな心性」40)の青年、清顕が何の必然性もなく見た、たわいもない白昼夢などではないだろう。そして、その幻は実際の「得利寺附近の戦死者の弔祭」の写真とは違い「兵士の肩にはことごとく雪が積み」そして「自分たち自身を弔ふためにうなだれてゐた」のである。「麻布三連隊」、「雪」、「うなだれてゐた」兵士たち。これは、2･26事件のイメージを喚起するには十分な材料である。

そもそも「得利寺附近の戦死者の弔祭」とは、松枝家にも保管されている「日露戦役写真集」の中の一枚であり、「たわやめぶり」のはずの『春の雪』は、なぜかこの写真についての描写から始まってる。松枝家では清顕の叔父二人が日露戦争で戦没していることから「得利寺附近の戦死者の弔祭」は「もつとも清顕の心にしみ入る写真」41)となっているのだが、その日露戦争におけるイメージが、ここでは清顕が「麻布三連隊」を通りか

38）2･26事件の当日、東京には朝から30年ぶりの大雪が降った。
39）中公新書、2001年8月
40）『春の雪』（18、42）
41）『春の雪』（18、11）

www.kci.go.kr

かった23年後に起きる2･26事件の幻視にすり替っているのである。（ちなみに『春の雪』第一章では日露戦争が終わった年、清顕が11歳であったことが記述されているが、これは三島由紀夫が2･26事件を体験したときの満年齢に当たる。）

さらに、蓼科の手引きにより清顕と聡子が「禁忌」を犯して結ばれる将校用の軍人用下宿の場所も、蓼科のセリフによれば「霞町三番地のあたりから、三連隊の正面のはうへ廻つて下りてゆく坂道」を下りていったところにある」42)のである。

以上考えて見ると、『春の雪』と2･26事件との接点が、決して小さくないことがわかり、作者が2月26日を大きくクローズアップさせて清顕を聡子に会いに行かせ、さらに拒絶されるように描いた理由もある程度推測ができる。

5．＜恋闕（れんけつ）の情＞と清顕

前章では2月26日という日付と『春の雪』における何カ所かからの記述を頼りに、この作品と2･26事件との関わりについて考察してみたが、以下ではそれが結末部分のストーリーとどう結び付いているかについて述べてみたい。言い換えれば「たわやめぶり」「和魂」の『春の雪』に何故2･26事件が関係してくるのか、という問題である。

2･26事件を簡単に説明すると＜天皇親政を掲げる皇道派の青年将校たちが「昭和維新」を目指して1936年2月26日に決起したクーデター＞ということになるが、天皇自らの命により、決起部隊は＜反乱軍＞として扱われ、クーデターは失敗する。

この事件の歴史的意味付けとしては、『二・二六事件「昭和維新」の思想と行動』に引用されている、東京帝国大学の河合栄治郎教授が事件後間もない1936年の3月に発表した下記の一文が参考になるだろう。

> 二・二六事件の本質は二つある、第一は一部少数のものが暴力の行使により政権を左右せんとしたことに於て、それがファシズムの運動だということであり、第二はその暴力行使した一部少数のものが、一般市民に非ずして軍隊だということである。
>
> 二・二六事件は軍ファシズムによる「自ら善なりと確信する変革を行うに何の憚る所があるだろうか」という根本的な社会変革への誤りから出発した事件である。43)

実際、河合教授の警告にも拘らず、その後テロに脅えた政治家たちは腰砕けとなり、日

42）『春の雪』（18、191）

43）3月9日付「帝国大学新聞」の「二・二六事件の批判」。高橋正衛（まさえ）『二・二六事件　「昭和維新」の思想と行動』（中公新書、2001年8月）23 p

www.kci.go.kr

本は軍部の独走により戦争の道をひた走るわけで、これが「ファシズムの運動」であったかどうかという疑問はさておくとして、日本の現代史から見れば非常に忌まわしい時代の発端となった事件が2･26事件であるというのが今日の定説になっている。

しかし、三島由紀夫にとっての2･26事件は、そのような客観的で冷静な現代史的意味づけからは隔たりがある。たとえば野口武彦の論文「三島由紀夫と北一輝－『豊饒の海』をめぐって－」44)に明らかなように、2･26事件が北一輝の革命思想の影響を受けて起こされたものであるにも関わらず、三島は北の「デモニッシュな国家改造の熱意」45)に自分の小説のモチーフにそぐわないものを感じ、『豊饒の海』シリーズ第二作の主人公を北一輝の息子とする当初の構想を早々と撤回、実際に書かれた『奔馬』では、主人公である右翼テロリスト・飯沼勲に北の「日本改造法案大綱」に「何か悪魔的な傲りの匂ひを嗅ぎ取」46)らせるのである。

周知のとおり北一輝は「日本改造法案大綱」を書いて、これを実践しようとした革命家である。二十四歳のときに「国体論及び純正社会主義」を自費出版し「伊藤博文のつくった明治国家の矛盾、国民の天皇、天皇の国家とはなにかというこれまで誰もがふれなかった矛盾を正面から暴」47)いた北は、「日本改造法案大綱」を表し、「昭和維新」を目指した2･26事件の青年将校たちにも多大な影響を与えた人物として、2･26事件収拾後に逮捕･処刑されている。だが「激動する支那大陸で、情で動く日本人には絶対に通用しない、情け無用の革命と陰謀の渦中に身を置いて生き抜いてきた」48)北の思想の本質は、「権力奪取の方式」としての、天皇を機能的に利用した国家改造であり、「万世一系の天皇を現人神とする超国家主義とは、大きく相違するものであった」。49)その意味で2・26事件は北と青年将校たちの同床異夢であったと言える。それに関して三島は「北一輝論―「日本改造法案大綱」を中心として」では「北一輝が天皇制に対する冷えた目をもっていた」50)のに対し「青年将校が熱いロマンティックな夢を抱いていた」51)と表現した。『豊饒の海』第二部のモデルを北一輝の息子にするという構想を、ある程度初期の段階で放棄した三島が見た場合、2･26事件の本質が北の「天皇制に対する冷えた目」にあったのか、青年たちの「熱いロマンチックな夢」にあったのかは言うまでもないであろう。

三島が拘ったのは、事件の政治性やその後への影響というよりも、この事件そのものが

44）野口武彦『三島由紀夫と北一輝』（福村出版、1992年4月）
45）「北一輝論-『日本改造法案大綱』を中心として」（34、103）
46）『奔馬』（18、587）
47）高橋正衛『二･二六事件―「昭和維新」の思想と行動』（中公新書、2001年8月）151p
48）矢部俊彦『二･二六　天皇裕仁と北一輝』（元就出版社、2000年2月）138p
49）平凡社『世界大百科事典』インターネット版
http://www.mypaedia.jp/@bd393737edd464e0b6578786bedef4a4898fc79547388cc70cbc1b7b77644ad9/netencyhomesv/index.asp?Word1=%8Dc%93%B9%94h
50）「北一輝論―「日本改造法案大綱」を中心として」（34、102）
51）「北一輝論―「日本改造法案大綱」を中心として」（34、102）

www.kci.go.kr

抱えているところの二つのアイロニカルな事実である。一つはクーデターを起すこと自体、＜天皇の軍隊＞であるところの帝国陸軍を、天皇の命に基づかないで勝手に動かし、帝都東京に混乱を引き起こすことになること、つまりがクーデター自体が「禁忌」の行為だということである。そして、もう一つは、その「禁忌」を犯してまで天皇親政を実現するために立ち上がった将校たちの声が当の天皇に届かず、天皇自らの命令で逆賊とされたという事実である。いうなれば青年将校たちは天皇によって拒絶されたのである。

『春の雪』の展開に即してここで考えなければならないことは、清顕の＜禁忌による恋＞というモチーフと、その後の清顕の行動に現われる＜断層＞とも言える部分である。そもそも、聡子を女性と意識しながらも当初は子供じみた恋愛ゲームに終始していた清顕が、婚約の「勅許」が下って彼女の皇室輿入れが決まってはじめて積極的な行動者となり、「禁忌」を犯すことによって恋の炎を燃え上がらせたこと、言ってみれば「不可能」を基盤に成り立っていたのが清顕の恋情であったことを考えれば、聡子の皇室輿入れが破棄された段階で、すなわち「不可能」が「可能」に変わったときそれが一つの終焉を迎えることが必然的な流れであるはずなのに、ストーリーはそうなっていない。

『春の雪』では聡子が中絶→剃髪→月修寺入り、と続く展開の中、清顕は執拗に聡子に会いに行こうとするのである。これを「禁忌」が取り払われたからこそ清顕は自由に愛する聡子を求めることができるようになった、と考えるのは余りに単純であるし、それでは＜禁忌に燃える清顕の恋情＞というプロットが否定されてしまうことになる。この＜婚約破棄後の清顕の行動をどう解釈するか＞について對馬勝淑は「禁忌が消失してしまえば、彼の行動は「実」を結ぶかも知れないのだし、一時的成功が永久的成功につながることも充分に予想できる。つまり婚約破棄後の清顕の行動が、彼の本性と矛盾する結果をもたらすであろうことは、目に見えている」にもかかわらず彼が聡子を恋し続けることの解釈について、次のような重要な指摘を行っている。

> （前略）この時点での清顕を描出するに際し、三島が、この巻独自のテーマであったろう「恋」ということのほかに、他巻との関連から、「純粋」性に対する抽象的テーマを強いて結びつけていることも見のがせない点だろう。『春の雪』だけを読む限りでは、清顕の行動におけるこの問題は多少唐突な感じがしなくもないし、そこに論理的矛盾が見られなくもない。だが、殊に次巻『奔馬』においてこの問題が一大テーマとして正面から扱われていることを理解し、そのことを『春の雪』の分析にフィードバックさせてみると、作者の意図に肯首できないわけでもなくなる。52)

ここで「この問題」とは清顕の「純粋」性のことであるが、このパラグラフを論者なりに

52) 對馬勝淑「『豊饒の海』と『浜松中納言物語』」「三島由紀夫『豊饒の海』論」（海風社、1988年1月）47-48 p

www.kci.go.kr

解釈するとこうなる。すなわち、本来「禁忌」を犯してまでの恋情という高度な「純粋」性が、聡子の婚約破棄によって「禁忌」が解き放たれた後も続くのは、清顕の恋が「禁忌」だけをよすがとする特殊なものであったからではなく、＜禁忌を犯してまでの恋＞とは別の次元での「純粋」性が清顕に内在していたからだ、ということになる。言い換えれば『春の雪』は、特に聡子の婚約破棄以降の点に関しては、バタイユ的な＜禁忌とエロチシズム＞では解決できない問題点を孕んでいるということである。

では、＜禁忌を犯してまでの恋＞とは別の次元での「純粋」性とは何であるか？それはシリーズ第二巻『奔馬』の主人公である飯沼勲的な「純粋」性である。

「神風連の純粋に学べ」（18、512）というスローガンを掲げて行動し散って行く飯沼勲的な「純粋」性が何故＜恋愛小説＞であるところの『春の雪』と関係があるのか。天皇信奉者で右翼テロリストたる飯沼勲の憂国の情と、松枝清顕の聡子への恋愛の情との関連性はどこにあるのか。

それを証明するものの拠り所とすべきものは、それほど多くはないが、論者はここで1967年に三島が書いた『葉隠入門』の一節を取り上げてみたい。

> ヨーロッパ近代理念における愛国心も、すべてアガペーに源泉を持つてゐるといつてよい。しかし日本では極端にいふと国を愛するといふことはないのである。女を愛するといふことはないのである。日本人本来の精神構造の中においては、エロースとアガペーは一直線につながつてゐる。もし女あるひは若衆に対する愛が、純一無垢なものになるときは、それは主君に対する忠と何ら変はりはない。このやうなエロースとアガペーを峻別しないところの恋愛観念は、幕末には「恋闕（れんけつ）の情」といふ名で呼ばれて、天皇崇拝の感情的基盤をなした。いまや、戦前的天皇制は崩壊したが、日本人の精神構造の中にある恋愛観念は、必ずしも崩壊してゐるとはいへない。それは、もつとも官能的な誠実さから発したものが、自分の命を捨ててもつくすべき理想に一直線につながるといふ確信である。[53]

この、元来日本には＜神の愛＞であるところのアガペーと、＜愛＞そのものであるエロスに境目がない、とする考え方の妥当性については、キリスト教的、西洋的な男女の恋愛と神との関係なども考慮に入れて検証する必要がある。また、「戦前的天皇制は崩壊したが、日本人の精神構造の中にある恋愛観念は、必ずしも崩壊してゐるとはいへない」という一節は素直に受け入れることは難しい。『葉隠』的な恋愛観念が喪失した今の時代だからこそ「本物の恋」を書こうとした結果物が『春の雪』ではなかったはずである。

しかし「武士道というは、即ち死ぬことと見つけたり」の一節で余りにも有名な『葉隠』が、実は「恋」の極致についても触れているものである、と指摘する政治思想学者・橋川文三の論考（「『葉隠』と『わだつみ』」[54]）を読む限り、必ずしもこれが三島の特

53）『葉隠入門』（33、73-74）

www.kci.go.kr

異な発想に基づくものではないことは理解できる。ただ、「戦後「葉隠」が否定されてゐた時代に、一生けんめいこれを読み続けて鼓舞された男は、私のほかには多くあるまい」55)と語らせるほど三島に深い影響を与えた『葉隠』は、いかにも三島らしい解釈で読まれ、またその文学作品にも影を落としていると見ることができる。

橋川によれば「一般に恋愛論が成立するためには、恋愛とそれ以外の人間的諸価値との間に、ある緊張・葛藤の関係が存在せねばならず、しかもその関係が社会的な文化形態として成立していなければならない」という前提のもと、例えば「アダムとイブ」神話が根本にある西洋の場合は「人は恋愛の中に神の恩寵と復讐という二重のドラマを感じとっている」のに対して日本には元来そのようなものが存在しない。日本にもし「恋愛論と称すべきものがあるとすれば」、「主君に対するロヤルティと、念者に対する恋と、この二つの間に生じる価値的葛藤の意識」を語っている『葉隠』が「ほとんどその唯一のものではないか」ということらしい。

ただ、ここで「念者」とは、男色関係における兄貴分のことであるし、『葉隠』恋愛論の中核をなす一節「命を捨つるが衆道の至極なり。さなければ恥に成るなり。然れば主に奉る命なし。夫故好きて好かぬものと覚え申し候」56)を見れば明らかな通り、『葉隠』は衆道を念頭に置いた恋愛論である。その意味で男性の主従関係が男色との「価値的葛藤」を生じやすい、いや主従関係ということを考えれば男色においてのみ「価値的葛藤」が生まれるとさえ解釈できる『葉隠』の恋愛論を一般の男女の恋愛論に置き換えて論ずることが果たして可能なのか、という疑問は残る。これについては『春の雪』に話を戻せば一応、この物語に表れる「禁忌」のような「価値的葛藤」を生ずる特殊なケースについては成立するものと解釈できるが、婚約破棄以降の局面では世間的な面目ということ以外の点では橋川の言う「価値的葛藤」は生じない。それでも「女あるひは若衆に対する愛が、純一無垢なものになるときは、それは主君に対する忠と何ら変はりはない」とあるように『葉隠』の熱心な愛読者・三島は、このあたりは気にせずに男女間の恋愛においても「主君に対する忠」のようなものが成立すると説いている。では三島が衆道も男女の恋愛も同一に取り扱っている理由はなにか？それはおそらく「純一無垢」ということに拘りたいからだと思われる。つまりはここでも「純粋」が問題にされているということになる。

ところで、三島が2･26事件の青年将校たちに、天皇に対する「恋闕(れんけつ)の情」を見て取ったことは、先ほどの引用文から推測できる。歴史上この青年将校たちに実際に「恋闕(れんけつ)の情」と呼べるほどものがあったのか、それともこれが三島に表出されたロマン主義的妄想に

54)『橋川文三著作集Ⅰ』（筑摩書房、2000年10月、312-319ｐに所収）
55)「わたしのただ一冊の本「葉隠」」（33、116）
56)「『葉隠』と『わだつみ』」『橋川文三著作集Ⅰ』（筑摩書房、2000年10月）315ｐ。橋川は同箇所を引用したうえで「この最後の言葉の中に、ごく簡明に『葉隠』の恋愛哲学が語られている」と述べている。

www.kci.go.kr

近いものではなかったのか、という歴史的検証を本稿でする余裕はないが、とにかく重要なことは、三島にとって天皇とエロスとは切っても切れない関係にある、ということなのである。先の引用文にある「官能的な誠実さから発したものが、自分の命を捨ててもつくすべき理想に一直線につながるといふ確信である」とは、2･26事件に参加できなかった反乱軍側のある青年将校が、国を憂えて夫人と自刃する「憂国」のテーマそのものである。三島はこの短編で、自刃する前の夫婦の情交を濃厚に描き、これを「喜劇でも悲劇でもない、一篇の至福の物語」（32、359）[57]と評している。

> 「憂国」は、物語自体は単なる二・二六事件外伝であるが、ここに描かれた愛と死の光景、エロスと大義との完全な融合と相乗作用は、私がこの人生に期待する唯一の至福だと云つてよい。しかし、悲しいことに、このような至福は、ついに書物の紙の上にしか実現されえないのかもしれず、それならそれで、私は小説家として、「憂国」一編を書きえたことを以て、満足すべきかもしれない。かつて私は、「もし、忙しい人が、三島の小説の中から一編だけ、三島のよいところ悪いところすべてを凝縮したエキスのような小説を読みたいと求めたら、「憂国」の一編を読んでもらえればよい」と書いたことがあるが、この気持には今も変りはない。（33、439）[58]

このようにエロスとアガペー、つまりはエロスと絶対者に対する愛が融合している三島であるがゆえ、小説『春の雪』において、清顕と聡子の繰り広げるエロスの中に、2･26事件の「恋闕（れんけつ）の情」が入り混じったとしても、不思議ではないのではないと考えられるのである。もちろん、右翼テロリストたる飯沼勲の憂国の情と、松枝清顕の聡子への恋愛の情の根本が同一線上にあるなどということは、常人の尺度からは考えにくい。しかしながら、三島由紀夫の美学という範疇では、これは完結しているのである。第五十二章、すなわち2月26日のあの日、咳き込みながら清顕は叫ぶ。「誠が足りなかつた。どんなに大儀であつても、俥を下りて歩いていれば、その人知れぬ誠があの人を打つて、会つてくれたかもしれないのに」、「そうだ。誠が足りなかつたといふ悔いを残すべきではない。命を賭けなくてはあの人に会えないといふ思いが、あの人を美の絶頂へ押し上げるだらう。そのために僕はここまで来たのだ」。しかし清顕の願い虚しく、彼は門前で聡子に拒まれて死んでいくのである。それはまるで「至誠」の念を抱いて2･26事件を起こし、天皇の大御心に期待しながら挫折していった青年将校たちのように。

57）「二・二六事件と私」
58）「「花ざかりの森・憂国」解説」

www.kci.go.kr

6．おわりに

以上、本論考では三島由紀夫の『春の雪』について、主に「禁忌」並びに「恋闕(れんけつ)の情」という観点から考察をしてみた。對馬勝淑が述べているように「他巻との関連から「純粋」性に対する抽象的テーマを強いて結びつけていること」が「作品的に価値ある結果をもたらしたかどうかということになると、それは別問題」[59]であろう。しかし、少なくとも次のことは言ってもよいのではないか。すなわち『春の雪』は（1）単なる恋愛小説ではないことはもとより（2）従来言われているような＜禁忌とエロチシズム＞という原理だけで進行する恋愛小説でもなく（3）また、輪廻転生としての意味だけで第二巻『奔馬』と繋がっているわけでなく、「純粋」性という点で松枝清顕と飯沼勲は繋がっており、（4）『春の雪』に登場する2･26事件のイメージがその演出装置として機能している。（5）言うなれば、聡子の婚約破棄以降における清顕の行動は、第二部『奔馬』の伏線として機能している、ということである。中でも特に従来「禁忌」のテーマを巡る論考が主流をなしてきた『春の雪』についても、三島の精神史に大きな影響を与えていると言われる2･26事件と作品の関連性が、淡いトーンではあるが認められることは重要である。たしかに、作者の言葉通り『春の雪』は恋愛小説なのかも知れない。しかし、恋愛小説は恋愛小説でもこの作品が『潮騒』的な意味での恋愛小説とは一線を画していることは内容的に明らかである。「たわやめぶり」の小説と三島由紀夫が位置付ける穏やかさの中にも、2･26事件に関する作者独特の美意識や観念が巧みに流し込まれている作品が『春の雪』だといえよう。

【参考文献】

有元伸子「綾倉聡子とは何ものか－『春の雪』における女の時間－」金城学院大学論集、国文学編36（金城学院大学、1994年3月）148ｐ

奥野健男　『三島由紀夫伝説』（新潮社、2000年11月）297ｐ

小田部雄次『華族　近代日本貴族の虚像と実像』（中公新書、2010年3月）3ｐ

島内景二「琥珀の中の虫－「女なるもの」との戦い」、「文芸別冊「三島由紀夫」」（河出書房新社、2005年11月）

59）　對馬勝淑「『豊饒の海』と『浜松中納言物語』」「三島由紀夫『豊饒の海』論」（海風社、1988年1月48ｐ）

www.kci.go.kr

清水徹「ジョルジュ・バタイユと三島由紀夫」（「国文学　解釈と教材の研究　五月臨時増刊　三島由紀夫のすべて」、学灯社、1970年5月）150ｐ、152ｐ、155ｐ
高橋正衛（まさえ）『二・二六事件「昭和維新」の思想と行動』（中公新書、2001年8月）23ｐ
対馬勝淑「三島由紀夫『豊饒の海』論」（海風社、1988年1月）47-48ｐ、131ｐ
野口武彦『三島由紀夫の世界』（講談社、1968年12月）239-240ｐ
野口武彦『三島由紀夫と北一輝』（福村出版、1992年4月）
橋川文三「『葉隠』と『わだつみ』『橋川文三著作集Ⅰ』（筑摩書房、2000年10月）315ｐ）
長谷川泉「豊饒の海」、「解釈と鑑賞 別冊現代のエスプリ 第四十八号」（至文堂、1971年2月）
林房雄『悲しみの琴』（文芸春秋、1972年3月）42ｐ
三島由紀夫「十八歳と三十四歳の肖像画」（三島由紀夫全集29巻、新潮社、1975年9月）343ｐ
三島由紀夫「自己改造の試み」（三島由紀夫全集32巻、新潮社、1975年12月）283ｐ
三島由紀夫「二・二六事件と私」（三島由紀夫全集32巻、新潮社、1975年12月）359ｐ、366ｐ
三島由紀夫『春の雪』（三島由紀夫全集18巻、新潮社、1973年7月）11ｐ，18ｐ、42ｐ、103ｐ、191ｐ、275ｐ、317ｐ、374ｐ
三島由紀夫『奔馬』（三島由紀夫全集18巻、新潮社、1973年7月）512ｐ、587ｐ
三島由紀夫「「潮騒」執筆のころ」（三島由紀夫全集27巻、新潮社、1975年7月）39ｐ
三島由紀夫『私の遍歴時代』（三島由紀夫全集30巻、新潮社、1975年10月）472-473ｐ
三島由紀夫『葉隠入門』（三島由紀夫全集33巻、新潮社、1976年1月）73-74ｐ
三島由紀夫「わたしのただ一冊の本「葉隠」」（三島由紀夫全集33巻、新潮社、1976年1月）116ｐ
三島由紀夫「私の近況-「春の雪」と「奔馬」の出版」（三島由紀夫全集33巻、新潮社、1976年1月）518ｐ
三島由紀夫「「花ざかりの森・憂国」解説」（三島由紀夫全集33巻、新潮社、1976年1月）439ｐ
三島由紀夫「「豊饒の海」について」（三島由紀夫全集34巻、新潮社、1976年2月）27ｐ、51ｐ
三島由紀夫「北一輝論-『日本改造法案大綱』を中心として」（三島由紀夫全集34巻、新潮社、1976年2月）102ｐ、103ｐ
三島由紀夫「「春の雪」について」（三島由紀夫全集34巻、新潮社、1976年2月）114ｐ
三島由紀夫「「春の雪」について」（三島由紀夫全集34巻、新潮社、1976年2月）252ｐ
三島由紀夫・東大全共闘『美と共同体と東大闘争』（角川書店、2000年7月）109ｐ
矢部俊彦『二･二六　天皇裕仁と北一輝』（元就出版社、2000年2月）138p
渡部芳紀「太陽の発見-ギリシャ体験と「潮騒」」（「国文学解釈と教材の研究」、学灯社、1976年12月）

www.kci.go.kr

要 旨

三島由紀夫の『春の雪』については、作者が自ら語るような「たわやめぶり」の小説としてのイメージが定着し、王朝風の美しい恋愛小説として解釈されるのが一般的である。しかし恋愛小説は恋愛小説でも、かなり異質な作風になっている部分があり、本稿ではその異質さを「禁忌」「恋闕の情」というキーワードを手掛かりに解明を試みた。そして『春の雪』の小説中に表れるいくつかの不思議な描写や、クライマックスで主人公・清顕が聡子に面会を拒否されて死んでいく過程を追うことによって、この作品と、三島の精神世界に大きな影響を落としている天皇制や2･26事件との関連性を指摘し、その意味について考察を試みた。『春の雪』を精読すると＜2･26事件三部作＞や『奔馬』の影に隠れて従来はあまり論ずることのなされなかったが、この作品にも2･26事件の陰影が淡いトーンながらもはっきりと映し出されていること認められる。

キーワード：たわやめぶり、禁忌、恋闕の情、葉隠、2･26事件、華族

투　　고：2012. 2. 29
1차 심사：2012. 3. 17
2차 심사：2012. 4. 7

www.kci.go.kr